「電波界50年」思い出の記

米村嘉一郎 (17)

52. 戦時の南方地域通信事情

昭和16年12月の太平洋戦争の開始後，国際電気通信会社の南方占領地域に対する事業の運営が，軍部官憲の指示によつて，急速に進展した。すなわち，同社は，陸海軍の担任地域別にそれぞれ総局，支社などを設け，要員資材を送つて施設の開設と拡充に従事した。海軍の占領地域は，今日のインドネシアのうち，ジヤワ，スマトラ、北ボルネオを除く全領域であつたが，この地域の通信施設をするために，昭和17年7月，要員と機材の第1次便をセレベス島マカツサルに送つて，8月同地に東印度総局を設け，陸軍地域と同様に，建設運営委託の形式で，まず，マカツサル日本間無線電信電話南セレベス有線電話の設営に着手した。次いで，第2次派遣員として一行50余名を出発させることになつた。筆者は，同年7月国際電気通信会社に復職して東印度総局長事務取扱に就任し，第2次の一行を率いて渡航することを命ぜられた。輸送船の都合や，出発の準備に日を費やし，9月7日横浜を出帆することに決まつた。その前夜全員が横浜の旅館に集合して，翌早朝大阪商船会社の北陸丸に乗り込み，午前8時に出帆した。行き先は占領地区とはいつても，戦局の進展によつてどう情勢が変わるかわからない。半ば生還をあきらめて故国を去る気持は悲壮であつた。

船は内地では，呉へ寄港しただけで，ここで4日間停泊，乗船人員約850人になつた。外海に出てからは，潜航艇を避けるために，ジグザグ・コースをたどつて進航し，高雄(台湾)，マニラ，ダバオ，アンボンに立ち寄り、そこから駆逐艦に守られて，10月4日ようやくマカツサルに到着した。これらの要員が着任すると同時に，通信機材も他の便船でぞくぞく内地から輸送されてきた。筆者は，会社から最初に当地へ出張しておられた黒岩（浩一）常務取締役に代わつて，後の仕事の一切をしばらく主宰しておつた。

そのころ，南方資源開発のために，各種の部門の日本商社が相ついで進出してきたが，その中には準備が不十分で，人だけ送つたけれども，物が着かないために仕事ができないので，手をこまぬいて時日を空費している会社もあつた。わが社は，幸いに，当初の準備がよく整つていたので，すぐに仕事に着手できたのと割合に進出が早かつたので，都合よく進行した。それと現地の官憲の援助によつて，資材の流用も調子よく運んだのが主因となつて，建設工事がはかどつた。

現地の通信事業は，オランダ時代には，PTTが経営していた。その重要施設はほとんど全部破壊されていた。特に，無線の送信所，受信所は，局舎も機械もなく利用できるものがないので，新たに敷地を選定し，建物の地形から建設しなければならなかつた。通信施設の中で残つていたものは，マカツサルでは市内電話に使う地下ケーブルと，市外地を連絡する有線電話の地方電話局舎と機械で，市外線も線路は所々不通になつているし，また，はずして持ち去つたところもあつた。その復旧工事は，初めに，軍政当局でやつていたが，後に会社へ引き継がれた。

軍政当局から最初に建設を急がせられたのは，マカツサル市内の電話の整備と，内地との無線電話連絡の開始であつた。送信所，受信所の建物は，第1次先発隊がすぐに工事に着手したが，機械類の到着が遅れ，12月8日の開戦一周年記念日までに間に合わせとの命令で，その期日までにわずか20日を残すという切迫したころに，ようやく，機械が到着した。即日船からおろし，すぐに現場へ運び，すえ付けに着手して，昼夜兼行で，文字どおり献身的に努力した。普通，すえ付けから調整までに，2か月を要する仕事をわずかに20日間で仕上げることができた。12月7日午後4時に電波を発射することができて，同時に，内地の名崎送信所小室受信所と連絡に成功した。

12月8日の記念日に，岡田民政府総監がNHKに向かつて記念の初放送をされた。その冒頭に，

「セレベス島マカツサルより海洋はるかに5千キロをへだてましたる故国の同胞諸君に放送いたしますことは私の生がいを通じて忘れ得ざる光栄であります……」

と述べられた講演であつた。この20日間という短時日で仕上げたのは，非常な幸運に恵まれて，輸送してきた機械が少しもこわれていなかつたことも早くできた原因であつた。あまり早かつたので，実に奇績的だ，ほとんど神わざであるとまで，当局からほめられて，工事関係者は感激の涙を流した。越えて15日に，マカツサルの大和

ホテルで，総監主催の慰労会に招かれた。出席者は，総監をはじめとして，民政府，民政部の部課長とわが東印支総局からの12名とであつた。その後，わが社の工事が現地でほかの商社の開発事業を促進する場合の模範としてたびたび引合いに出され，他社へのいい刺激になつた。ここの受信所の建物は，マカツサルで日本人が進出して，その手で成つた最初のもので，記念物に値する。

当総局の事業は，市内，市外の電話交換，対内地，大東亜共栄圏内諸国，南方占領地域内相互間の無線電信による連絡，対内地，朝鮮，満洲との無線電話の連絡，対内地，対外国，占領地域内のラジオ放送の設備，無線電信による同盟通信社の放送などの設備をしたことであつた。ラジオ放送はプログラムを組むことや，実際の運営を，軍当局がやつたが，その他の通信業務は，すべて当総局が運営した。

最初の通信業務は，昭和17年12月1日に，マカツサルの市内電話交換を取り扱う電話局の開始であつた。この市の電話は，戦前800の加入者があつたが，このとき市内加入者約480を収容した。ほかに，市外が6回線，海軍全地域内の電話局の数は，150余局になつた。通話の用語は，皆日本語とマレイ語で，交換作業には原地人の若い女子を使つた。これらの従業員は，日本語をよく話すことができたので，番号を呼ぶにも日本商社からはマレイ語でなしに，なるべく日本語を使うようにすすめていたほどであつた。ただ，対内地の無線電話交換は，いろいろ複雑な会話があり，空中状態が悪くて話がわからないと待つてもらつたりしなければならないから，原地人では不適当であるので，日本女性4人でこれを担当した。

ＰＴＴの時代から，電話網を通して電話電報（ホノグラム）を取り扱つていたが，日本の統治下でもこれを継続した。南セレベスの電話は，皆鉄線で，しかもアースを使う単線式であつたから，あまり遠方へ話が通じないので，直接に話のできるところへは電話によるが，遠距離の場合は，伝言の中継によらなければならない。したがつて，電話電報が必要である。最初，防諜の関係から用語を日本語に制限したが，実施して見ると，日本の進出商社は，いなかでは原住民に一切を任せてあり，監督する日本人は都市に居て，そこから時々出張して行くのだから，日本語では，原住民にわからない。そんな不便があつて，マレー語も使えるように規則を改め，日本語とマレー語とを使用できるようにした。もつとも，これは電話電報だけに認められたので，一般の電信には，日本語以外を使わせなかつた。

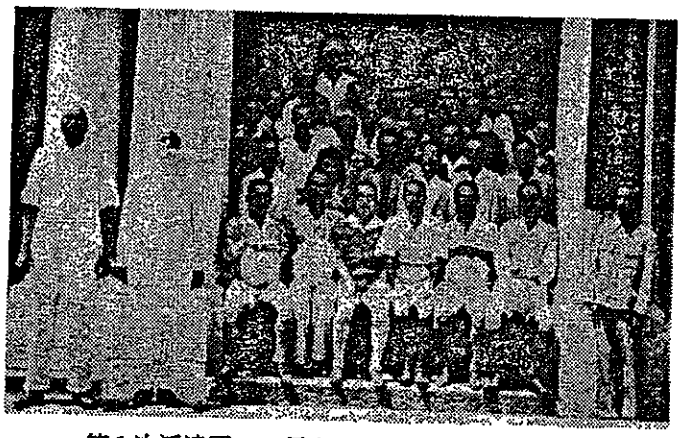
東京マカツサル間の無線電信電話は，前に述べたとおり，昭和17年12月7日から連絡できるようになつたが，業務開始のための準備期間中は試験通信を続けていた。

翌18年2月1日に，対内地の無線電話連絡とマカツサル電報局の無線電信業務（対内地連絡を含む。）を正式に開始した。無線電話は，東京中央電話局をへて国内各地へ接続したが，9月から朝鮮，満洲へも，東京で無装荷ケーブルを使用して，連絡を開始するようになつた。まだその試験中のことであるが，4月初めに，筆者は京城在住の国際電気支社長佐々木仁取締役，旧友足立文伍君，また，ハルビンの日本電話局長を呼び出して通話を試みたが，良質の感度で，マカツサルから話していることを聞いて，3氏は事の意外なのに驚いた様子であつた。

マカツサル電報局は，海軍地区で最大のもので，1日の取扱数は，1,000通に上ることもあつた。その後，セレベス島，ボルネオ島（北部を除く），セラム諸島，小スンダ列島，ニューギニア島の海軍全地区に開設した電報局は，約15局で，1か月にざつと2万通の電報がこの地区で動いた。これは，すべて，公衆電報で，軍人軍属は電信を利用することができないから，一般人が使うものであつた。和文電報と欧文電報とがあり，用語は日本語の普通文と許可された暗語に限つた。受付，通信，配達の事務は，一切，国際電気通信会社が取り扱い，従業員は，指導階級には邦人をあて，その監督を受けて，主として，原地人が通信も受配も行なつた。料金は，現金で受け取り，対内地通信や陸軍地区との通信関係でも，料金の計算は，発信局取りで，全部受付側の収入になるから，着信に対しては，計算をしないので，計算書を作る手数もなく，簡単であつた。

原地人の通信従事者は，戦前ＰＴＴに勤めていた者がジャワへ逃げたりして，残つていた者を調べて全部使つたから，今後の補充に備えて現地人を養成することにした。18年3月，マカツサルに会社所属の養成所を置いて，技術科と通信科の2組を設け，17才から24才くらいの男子を入学させた。

当地には，約3か月で修了する日本語学校があるので，その卒業者を募集した。入学試験の科目は，日本語の会話，作文，訳読，数学で，翌年3月，45名卒業した



第1次派遣団の一行寄港地昭南（シンガポール）
（昭和17年7月）

が，相当に成績が良いので，引き続き4月から約同数を入学させた。養成方針は，日本精神のかん養に努め，強く正しい通信従事者をつくることを主眼にして，教練は司令部の軍人を頼み，修身は軍政当局の司政官に講演してもらつた。日本語で教えたが，数学，技術の科目は難解な点が多いので，原地人の教師も加わつた。

時に，日本語大会を開いて，来賓の前で生徒に演説をさせたが，なかなかじようずな日本語で，立派なことを述べた。かれらの言うことを聞くと，今までは勉強したくても，学校へ行けないようになつていた。非常に高い授業料を取られて普通の人は，高等の学校へははいれなかつたけれど，今では高等の教育をしてもらえるから非常にうれしい解放してくれた日本のために，協力しなければならないというようなことを強調した。もちろん，これは教練や，修身の時間に教師から教え込まれたであろうが，ともかくも心からそういうふうに言つた。卒業した者は，和文タイプができるものもあり，マカツサルその他の地方の送信所，受信所，電報電話局へ配置した。

現地における事業の整備拡張については，現地監督官庁の指示を受け，計画，実施を進めるのであるが，資材や要員の関係，主として輸送の都合で，工事の進行，業務の開始が多少遅れたこともあり，また，戦局の変転で予定の計画を変えなければならないこともあつた。

マカツサルは，赤道直下のとこ夏の国にあつて，年中路傍の花が咲きつづき，軽装で飛びあるき，人心もおだやかで，住み心地のよい土地であつた。オーストラリアの基地を飛び立つ飛行機の空襲の危険を感ずるようになつたのは，昭和18年5月末からで，以後空襲警戒警報を発せられる回数が次第に多くなつた。最初の空襲は，6月23日午前11時過ぎから9機襲来して，約2時間にわたつてマカツサルの港湾を侵し人命と建物に相当な被害を与えた。次ぎに，7月18日夜中の空襲で，このとき，われらの仲間に劇的な場面を呈したことが思い出される。

マカツサル在住当時の筆者（昭和18年5月）

この夜11時，空襲警報を聞いて総局へ駆け込んだ者十数名は，構内の防空ごうに待避した。一同は，飛行機のばく音に耳を傾けながら，攻撃の目標が市街であるらしく察しられ，互いに寄り添つて，生きた心地もなく，最期を待つのみで，重苦しい沈黙がつづいた。このとき，筆者は「こうなつたら一連託生だよ。なむあみだぶつ，なむあみだぶ。」（手には親ゆずりのじゆずをもつていた）と二声唱えおわらないうちに，ばく弾は頭上をこえて，つい隣家の上に落ち，ごう音がひびきわたつた。幸いに一同はきわどいところで命びろいした。あとで皆から，米村は恐ろしさのあまりに念仏を唱えたと評されたが，あのとき死生の境にいて，だれも一言も発しない中で，年長者の口からもれた自然のことばでぶきみな沈黙を破ることができた。その攻撃は4時間つづいて，午前3時に終わつたが，諸所の建物に大きい被害があつた。

南セレベスの市外電話施設は，前に言つたとおり，軍政当局が管理していたが，会社へ移管することになつてその引継ぎのために，官側と会社側との関係者（筆者も同行）4人が，7月29日出発，セレベス南部各地の現場一周の旅に上つた。セレベス島は北側と南側との境に山地の密林があり，交通が困難で，たとえば，マカツサルとメナドとの間は飛行機か船によらなければならないようなところであるから，島は地理的に二分されている。この島で開発されている地方は，南部だけで，そこでは至るところ，海抜800メートルの山頂へまでも，舗装してあり，自動車のドライブが自由である。各地の電話施設や，日本商社経営の施設，工場などを視察して，8月11日マカツサルへ帰着したが，14日間で2,550キロメートルを走破した。

前に言つたように18年2月1日に，マカツサル無線電報局を開始したが，その後，海軍地区の主要地点に，相次いで，無線電報局が開始された。すなわち，次のとおりである。（筆者手持ちのメモからとつたので，記入もれがあるかも知れない。）

昭和18年2月1日

マカツサルと内地との間無線電信および無線電話開始

同年3月1日

マカツサルとバンゼルマシン（南ボルネオ）との間，マカツサルとアンボンとの間無線電信開通

同年3月10日

マカツサル中継で，内地とバンゼルマシン，アンボンとの間無線電信開通

同年3月10日

マカツサル—バンドン(ジヤワ)中継で，マカツサル，アンボン，バンゼルマシンとジヤワ，マライ，スマトラ，ビルマ，北ボルネオとの間無線電信開通

同年3月15日

マカツサルとメナドとの間，マカツサルとシンガラジヤ（バリ島）との間無線電信開通。メナド，シンガラジヤはマカツサル中継で，内地，バンドンへも連絡する。

同年4月1日

ドンガラ（セレベス島），バリクパパン(南ボルネオ)に無線電信業務開始

同年4月15日

メナドとドンガラとの間無線電信開通

同年5月1日

ポンチヤナク（南ボルネオ）と海軍地区，日本内地，陸軍地区との間無線電信開通

ドンガラ発マカツサル着気象電報取扱開始

同年5月25日

タラカン（南ボルネオ）およびデンパツサル(バリ島)に無線電信業務開始

同年5月27日

マカツサル同盟通信社同報無線電報開始

同年7月1日

マノクワリ（ニユー・ギニア）に無線電信業務開始

同年7月10日

マノクワリとパラオとの間無線電信開通

同年7月20日

マカツサルとバリクパパンとの間直通無線電信開通

同年8月1日

南セレベス市外電話を会社へ移管

同年9月1日

マカツサルと新京，奉天，ハルピン，京城との間無線電話開通

同年9月21日

マカツサルとパレパレ（セレベス島）との間無線電信開通

同年11月1日

サマリンダ（南ボルネオ）に無線電信業務開始

同年同月11日

ポマラ（セレベス島）に無線電信業務開始

昭和19年2月1日

テルナテ（ハルマヘラ島）に無線電信業務開始

同年4月1日

ゴロンタロ（北セレベス）に無線電信業務開始

同年4月20日

コタバル（南ボルネオ）に無線電信業務開始

同年5月5日

バウバウ（セレベス島）に無線電信業務開始

同年7月10日

アンベナン（ロンボツク島）に無線電信業務開始，バリ島と交信

以上は17年夏から19年7月，筆者が内地へ帰還のためにマカツサルを立つた日までの間の現地の事情の大要である。現地で働いた邦人要員は約200人で，有線工事要員の一部を日本電信電話工事会社から借り，電信通信士その他の通信運用の担当者は，内地の既経験者を募集して社員に加えた。ほかに，できる限り，現地人を使役したので総数2,000人以上であつた。

戦況が日を追うて不利となるに従つて，輸送中の人員機材にしばしば被害を受け，計画の実施に重大な支障を重ねるようになつた。戦争の末期には，海軍地区も空襲その他による被害が大きくなり，特に，マノクワリ，タラカン，バリクパパンは，戦場となつて，職員中に犠牲者を出した。その他の各地でも，業務は縮小後退を続け辛うじて最少限度の通信を確保するに過ぎなかつた。20年8月15日に戦争が終わつた後は，マカツサルでは，オーストラリア軍が上陸したので，会社の施設全部をいつでも使えるように現状のままで軍の接収に任せ，一同は収容所へ送られた。また，ある地方では，接収のための軍隊がこないので，電報局も電話局も，かなり長い間そのまま会社の名において執務を続け，退去の日に，使役していた現地人に後事を託して，無事に引き上げたということである。開戦以来数年間にわれらの努力で成つた建物と設備は，その技術とともに，新興国インドネシアのために，その復興と開発に大きく役立つていることと信じられる。

（電波研究所勤務）

≪新刊御案内≫

電波法令集　追録　15号　価 120円 〒 24円　（電略ツカ）

遭難通信関係など 35. 11. 30 現在までの改正点を収録

財団法人 電波振興会　東京都麻布局区内 振替 東京 19918